

極早生タマネギにおける効率的なネギアザミウマ薬剤防除体系の確立

【背景・目的・成果】

ネギアザミウマは、薬剤抵抗性が発達しやすい難防除害虫であり、令和2年以降、県下のタマネギ産地では、本虫が媒介するアイリス黄斑ウイルス(以下、IYSV)による病害の多発事例が相次ぎました。そこで、ネギアザミウマおよびIYSVの主な発生源の1つである極早生品種における発生実態を明らかにし、薬剤検定に基づいて選抜した殺虫剤による効率的な防除体系を構築しました。

ネギアザミウマ成虫



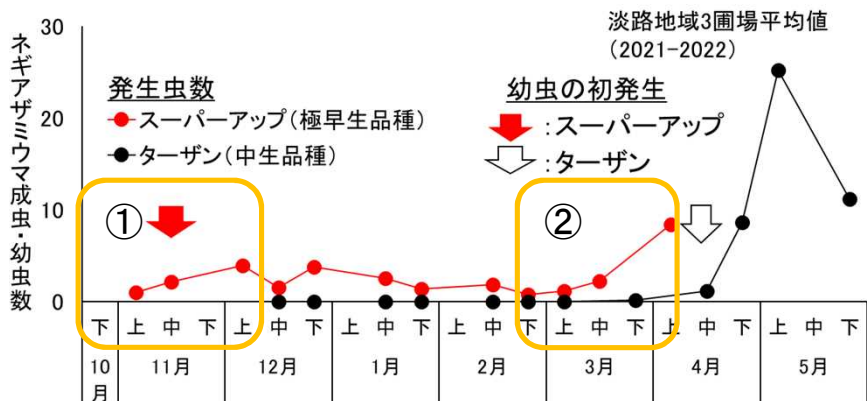
- ・野菜類、花き類等を加害する難防除害虫
- ・IYSVを媒介

- ・葉身に5~50mmの紡錘形のえそ条斑を生じる
- ・多発すると葉が枯死して、収量減！

IYSVによるタマネギの病徴



タマネギ圃場におけるネギアザミウマの発生推移



- ・ 極早生品種では...
①定植直後(11月~12月上旬)と②春期(3月以降)に幼虫が発生し、増殖！
- ・ 栽培期間を通して、IYSVの保毒虫が継続して存在!!

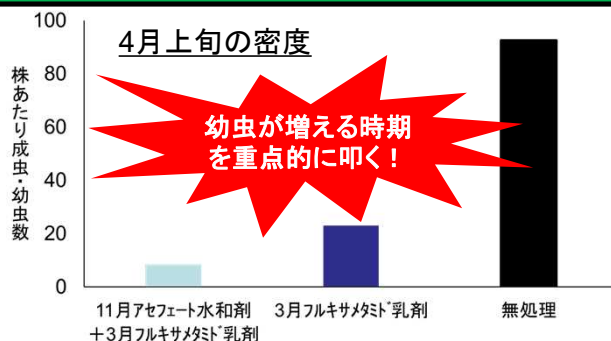
中生品種への拡散をふせぐためにも、**極早生品種での防除対策が重要!**

ネギアザミウマに対する各種薬剤の殺虫効果(室内検定)

薬剤名	希釈倍数	地区						6地点平均
		A	B	C	D	E	F	
アセフェート水和剤	1000	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
プロチオホス乳剤	1000	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
フルキサメタミド乳剤	2000	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
フロメキン水和剤	1000	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
チオシクラム水和剤	1500	○	○	○	○	○	○	○
シアントラニプロロール水和剤	2000	△	○	○	○	○	○	○
A剤	2500	△	△	×	○	◎	◎	○
B剤	2000	△	×	×	○	×	○	△
C剤	2000	×	×	×	○	△	○	△
D剤	1000	×	△	×	○	○	○	△

室内試験における補正死亡率 ◎:90-100% ○:70-89% △:40-69% ×:0-39%

ネギアザミウマの発生実態に即した効果的な薬剤散布時期



アセフェート水和剤やフルキサメタミド乳剤、フロメキン水和剤等が有効!

3月は必ず薬剤散布を実施! 11月散布も組み合わせるとさらに有効!

【技術の活用】

ネギアザミウマは野菜類・花き類など様々な作物に寄生するため、IYSVによる被害低減に向けて地域全体で密度を下げる必要があります。JAの防除暦等に反映し、防除指導の一助とします。

